

「リアル・レンタル彼氏」

— 2 稿 —

2026/07/08

山極 瞭一朗

〈人物表〉

佐伯	さえき	莉子	りこ	(27)	会社員
高橋	たかはし	誠	まこと	(35)	莉子の上司
馬場	ばば	美智	みち	(27)	バー店主・莉子の友人
神谷	かみや	悠真	ゆうま	(30)	新社長

ことわざ

「嘘から出たまこと」

1.

会社・エレベーター前（夕）

丸ぶち眼鏡をかけた地味系女性の佐伯莉子（27）、
小太り上司の高橋誠（35）に腕を掴まれている。

莉子 「あ、あの……」

高橋 「あ、悪い悪い。さすがに不味いよね」

ニヤリとイヤらしい笑み。

掴んだ手を咄嗟に離す。

莉子 「職場です」

高橋 「とはいえ仕方なくない？ デート乗ってこないんだから。

僕だって別に職場でアプローチしたいわけじゃない」

莉子 「……何度も言ってますけど」

高橋、遮って、

高橋 「わかったわかった。じゃあこうしよう」

莉子 「え？」

高橋 「いくらほしい？」

莉子 「はい？」

高橋 「ほら、レンタル彼氏ってあるでしょ。なってあげるよ。

それだったら問題ないでしょ」

莉子 「あの……」

高橋 「何？」

莉子 「……本当にごめんなさい」

高橋 「いやいや、まだ何も始まってないからね。わか——」

莉子、高橋の言葉を遮って、

莉子 「わ、私彼氏います」

高橋 「は？」

莉子 「だ、だから付き合うとかできないんです」

高橋、ポカンとしている。

莉子、言ってしまったと口を震わせている。

通路を曲がった先、莉子たちを見ている人影がある。

2.

バー・外観（夜）

路地裏にひっそりと佇む隠れ家的バー。

「Bar Bali」とアジアリゾート風の看板。

薄暗い店内は、南国バリの雰囲気をおぼせるアジア
ンテイストのインテリアで統一されている。

それなりに繁盛しており、客たちは静かに談笑中。

莉子、カウンター席。グラスを磨く店長の馬場美智
（27）と話している。

「I LOVE BALI」のTシャツを着た美智は素っ頓

狂な声で、

美智 「莉子に彼氏だと？」

客たちは一斉に美智を見る。

莉子、気まずそうに顔を伏せる。

美智、我に返り、

美智 「あ、ごめんなさいね。こっちの話なんで、みなさんご歓
談あれ〜」

客たちは談笑再開。

美智、ぐっと莉子に顔を近づけて、

美智 「彼氏いない歴〃年齢だろ」

莉子 「だから、嘘ついたんだよ」

美智 「いや待てよ。あるいはこれはチャンスととれる」

莉子 「ん？」

美智 「課長から告られたんでしょ。圧倒的チャンスだ」

莉子 「話聴いてたよね？」

美智 「撤回だ。今からでも遅くはない」

莉子 「待って」

美智は構わず続ける。

美智 「課長ならきつとそれなりの給料だ。独身を貫いているな
ら貯金だってあるはず。莉子のこと大好きなら尽くして
くれる。これぞ理想の――」

莉子、遮って、大声で、

莉子 「タイプじゃないんだって」

客たちは一斉に莉子を見る。

莉子、気恥ずかしそうにトーンを落として、

莉子 「小太りきもオヤジ。金で私を買おうとしてきた」

美智 「そっち系か」

莉子 「あまりに誘ってくるから嘘ついたんだけど……」

美智 「ストーカー入っちゃってるのね」

莉子 「証拠もせがんできた」

美智 「は、彼氏の？」

莉子 「諦めがつかないって」

美智 「激やばキモ男じゃん」

莉子 「でも証拠出さないとまた誘われる」

美智 「なるほどね」

莉子 「どうしょ……」

カウンター席、莉子たちの話を聴いている男がいる。
暗がりでは顔は判然としない。

4. バー近くの道（夜）

店から莉子が出てくる。

スマホを確認し、ため息。

画面、高橋からの誘いの連絡が多数。

莉子、トボトボと歩いていく。

悠真の声 「幸せが逃げますよ」

莉子、ハッとして振り返る。

スラリとした体躯の爽やか好青年、神谷悠真（30）
が颯爽と歩いてくる。

悠真 「大変そうですね」

莉子、不思議そうな視線を投げかけ、

莉子 「あの……」

悠真 「すいません、聴こえちゃって」

莉子 「ああ、ごめんなさい、御見苦しいところを」

悠真 「スマホ、お借りしていいです？」

莉子 「はい？」

悠真 「スマホ」

莉子 「あの、どういう——」

悠真、ずっと莉子からスマホを奪う。
そしてすかさず莉子とのツーショットを撮る。

悠真 「これで大丈夫じゃないです？」

莉子 「はあ……」

悠真 「彼氏、俺がならせてもらいますよ」
莉子 「し、失礼ですが、あなたは……？」

悠真、問いには答えず、立ち去ろうとする。

莉子、思わず、

莉子 「あの」

悠真、立ち止まり、振り返る。

莉子 「どういふつもりなんですか」

悠真 「そのうちわかるさ」

ニヤリと笑って、立ち去る。

莉子、呆然と立ち尽くす。

スマホ画面、莉子と悠真のツーショット。

5. 会社・大会議室（昼）

ホール風のつくり。壇上には「〇〇株式会社 新社
長就任式」の看板がでかでかと飾られている。
社員たちは続々と入って来て、席に着く。

6. 会社・廊下（昼）

大会議室の外。

莉子は高橋に相對している。

高橋 「だからさ、何度も言わせないでよ」

大会議室に社員たちが入っていく。

莉子 「彼氏が写真はNGだって」

高橋 「いやいや、莉子ちゃん。どうせつくならもっとマシな嘘

つこうか」

莉子 「嘘じゃな——」

高橋、遮って、

高橋 「例えばね、レンタル彼氏雇って、その写真を見せるとか」

莉子 「……」

高橋 「莉子ちゃんのことだから見え見えのバレバレだとは思っ

けど、写真NGよりはよっぽどマシ」

莉子、大きくため息をつく。

高橋 「まあ、いいよ。今度さ、映画行こ。とりあえず就任式終
わったら、2人で話そっか」

高橋、莉子の肩になれなれしく触れようとする。
すると、その手が掴まれる。

高橋、驚いて顔をあげる。

悠真が高橋を見下ろしている。

高橋 「誰？」

莉子、悠真をチラッと見て、目を見開く。

悠真 「写真、使ってないんだ」

高橋、悠真の手を振りほどき、

高橋 「な、なんなんだよ」

悠真 「これは失礼。就任式、もう始まりますよ」

高橋、莉子を見つめて、

高橋 「莉子ちゃん、またあとで話そう」

高橋はそそくさと大会議室に入る。

莉子、俯きがちに悠真を見つめる。

悠真 「俺が彼氏になるって言ったのに」

莉子 「……結構です」

悠真 「え？」

莉子 「誰か知らない人に頼むなんてできません」

悠真 「知らない人ね……」

ふっと笑みをこぼす。

7.

会社・大会議室（昼）

数百人あまりの社員たちは一様に壇上に視線を向けている。

壇上、マイクを持つ悠真。

モニターには「新社長 神谷悠真」の文字と彼の経歴がずらりと記されている。

悠真 「本日より代表取締役社長に就任しました神谷悠真です」

隅の方に座る莉子、悠真に視線が釘付け。

悠真 「私が掲げる改革はズバリ、スクラップ・アンド・ビルド。慣れ親しんだやり方、慣習、そんなものは全部クソ喰らえです」

莉子、どこか心ここにあらずといった様子で話が耳に入っていない。

悠真 「執着など無価値。私と共に新たな価値を創出していきま
しょう」

社員たちは一斉に拍手をする。

悠真 「あとそれから」

拍手が鳴りやむ。

悠真 「この会社には私の大切な人がいる」

会場からざわめき。

高橋は興味ないのか、鼻をほじっている。

悠真 「佐伯莉子さん」

高橋 「え、莉子ちゃん」

社員たちの視線が莉子に注がれる。

悠真 「彼女は私の婚約者です」

莉子、開いた口がふさがらない。

悠真 「男性社員のみなさん、私情で恐縮ですが、彼女には指一

本、触れないくださいね」

莉子 「いや……」

肯定も否定もできない。

（終わり）